

詞乃橋立  
弘鴻編集  
一

ホ 2  
561  
1



加  
561  
1

弘鴻編集

詞乃橋立

日文堂藏梓

國木田

同書



新書もあまの安らまを  
思ふは、神の橋をたまたま  
おぼゆる

近藤清石

ふかき川の幸なる國を安らむ  
心もあまの安らまを

ふかき川の幸なる國を安らむ  
心もあまの安らまを  
思ふは、神の橋をたまたま  
おぼゆる  
新書もあまの安らまを  
思ふは、神の橋をたまたま  
おぼゆる

志むしきとこそいふ良しむもゆゑしき  
 こころ私あはれし人ありゆ此言書  
 取もよる能はしこと終の林字取なら  
 けり此ふい初めし一平とよも字取ゆ  
 らしし字の人これたせもあはれらるるま  
 所りの不さきあふしとまらばゆい  
 おひらきしとまらばなまおあゆまか  
 此れを書ふことものしてよとこと  
 といふ花くて拙きもあはれらるる  
 明治十七年七月

城村五百街

詞乃橋立目錄

○第一篇

一 五音の原由

三 假字用格

五 延言

七 轉言

二 五十連聲

四 約言

六 畧言

○第二篇

一 體言

三 用言 八街の圖

五 自他言

二 體言受辭

四 用言受辭

○第三篇

詞乃橋立

一 係結辞 紐鏡の圖

○ 第四篇

一 冠言

○ 第五篇

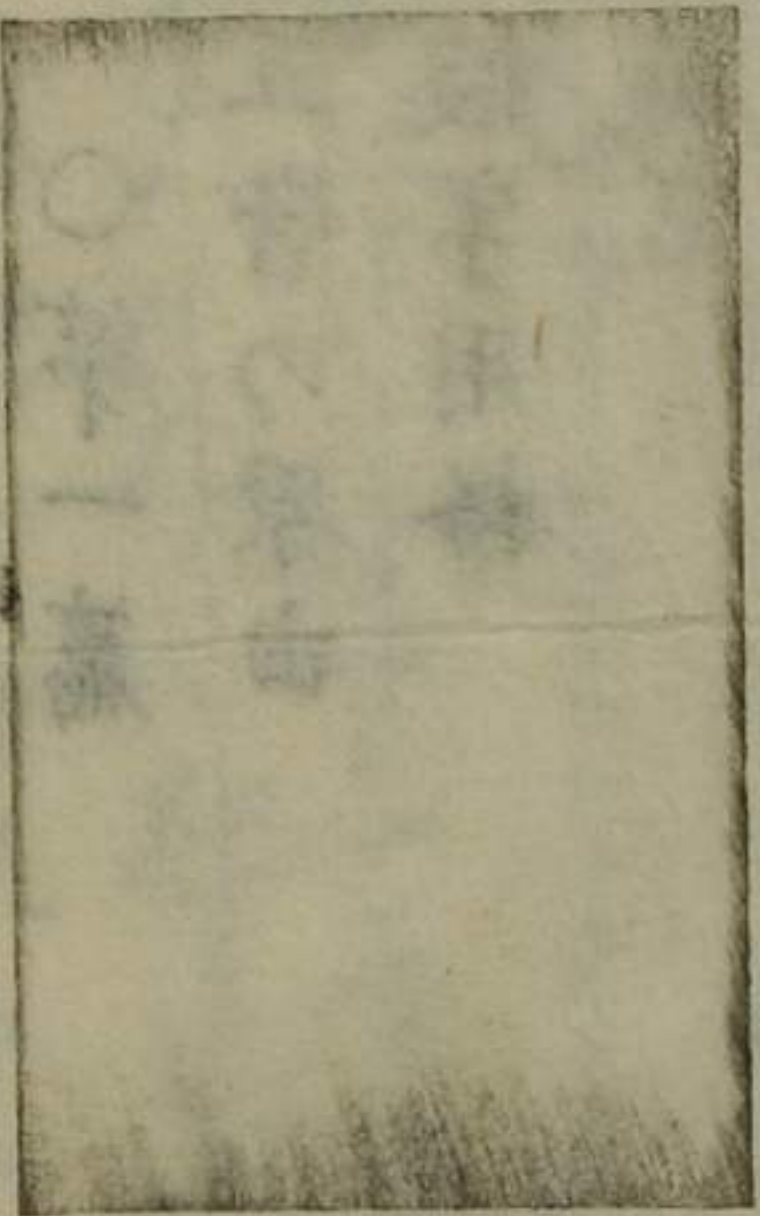
一 詞の組織

二 作文

二 助辞並發語

二 兼用言

三 詠歌



目錄 畢

詞乃橋立第一篇

弘のむろりあつむ

○ 第一章 五音の原由 (イツコエモト)

古言梯の序ふしつとくを此親あふものをたづぬまをあいうえをの五十連乃あふよあもあもこれぞこの天地乃ひけけもまうりふら時たあふ皇神乃みこと此御口よをのこまいはどめををあえのまを人高山乃たわくお傳へこと此浪の志きくふやたへ来まうそのありつるとあるを只人の口よの傳をりけむと思ひし一とるれことなる

詞乃橋立

一ノ一

たり然ふよろづいへふ立りつる大御代の志  
 りしや此ころ上<sup>ウツラフ</sup>記といふ古書のあるはれ出する  
 ふよりて此の言此葉乃本を高く思ひ深くもきま  
 へ得るふ神代のむらやありて八意思兼命徒不  
 口を画し書きまゝして五言の音を今ち玉へり  
 其様を見らふつ此も口なり口づつ生るづも  
 のもアありひびくそつなままを三なりあそ  
 三なりまらハナありとかくありしより五十言猛  
 命此五つの言玉乃緒を十連なりて形あるハ形を  
 画き形なきを假<sup>カダ</sup>画<sup>カヘ</sup>きて五十連を作り玉へり  
 ふよりて此を形假名といふこの故に御名をもか

くをまをいといへり扱其様ハ

ア	氷	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ
エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ
オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ

其後續羽八重言代主命此五十連の画をみて種々此  
 物語を書つてあしそ天覧不備へ奉るをられ此乃  
 言代をいと清くありををりつるかもや宣り玉ひけ  
 る故に此画をモジリといひ又過ぎふし言の葉を二  
 たび爰に見つるかかも宣り玉ひたる故にフタ三と

いふ此大御言の残るをりて今モジ(文字)やいひつ  
三(文章)といふも其畧言なり此故小御名をもかくハ  
申まをりり又其後言代主命の裔エタ、命オトタ  
、命彼五十連の画を画きやすかゝるあむと書相  
玉ひて其上小濁字二十中添字二つとあをせて七十  
二文字を作り玉ひき其様ハ

ア イ ヲ エ ナ  
由 幸 多 叩 コ  
卅 十 久 义 叫  
皿 七 口 子 ト  
下 山 企 上 へ

附濁字  
ナ キ ク ケ コ  
廿 シ ス 又 ソ  
立 半 日 テ ト  
ハ ビ 一 ツ 飞

ハ 凶 フ 六 下  
マ 三 ム ノ 个  
中 母 ヌ 弋 六  
ラ 丰 ル レ 下  
ワ 介 司 上 下

又添字  
介 此 中 此 字 の 意  
く 此 中 此 字 の 意

同書小大友能直朝臣のまゝ書ありて其詞は御代  
より下りりて後小吉備の臣漢の文字をとりて兄  
も弟も多くの命乃和玉ひ形假名の七つ八つ  
もかゝる此まの片を小似たりむ文字のあるま  
ら小思ひ付りまわひりる小そを取らえありて  
十八文字を入替てこゝに小漢乃文字のかゝると言

えてふまてて名をいへし形假名を片假字や改る  
 きたるを臣のいみじき罪にあもありき云々といへ  
 りあつる皇國よ上つ世文字なり輕島の豊明の  
 朝〔紀元九百三〕小至りて百濟王博士王仁を貢きまら  
 り〔十年〕云々と古語拾遺〔齊部廣成宿〕小いもれた  
 るより人皆文字ハなごりしと思へるもことごと  
 なるをいふか千万年を經るまでも文字のありて言  
 葉のよめてあるをきこうえかき新井平田此二翁ハ  
 小見りありて古来文字ありしことを論いたられた  
 りよ此の如く確ある證此世小頭まゝもむけよ明  
 げく治まる御代の幸福小なるむありらふ

○第二章 五十連聲 (イツラノコエ)

一 詞の生立の系圖

一息

- 二息
- 三音
- 四韻
- 五声
- 六言
- 七詞

八歌

詞の繩墨スミナハ小いとく人此胸の内よ肺フクシといへるも  
 乃ありそれ則息の袋なるが其袋より常よ出  
 入する息を直小兩此鼻孔小通ふなり扱人乃  
 心よ思ふことを言小出さむとする時ハ先息オキ口  
 小出て音をなごり又其音尾小おのづか韻リキを



生一口中の各觸る、所よりて所謂五十連  
 声の限カキリをなすなり斯て其音韻乃調子シラベの整ひ  
 たるを声コエといひ其声又彼是と相合ひて言コトとな  
 り其言の全く連りて文コトあるを詞ワカといふ扱其詞  
 心此実情よりあつをれて風調あるを歌ウタといふも  
 いふふぞあつと云り

二 五十連聲の圖 附 各義

經	緯
第一聲	
第二聲	
第三聲	
第四聲	
第五聲	

(濁音)

ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ラ	ワ
イ	キ	シ	チ	ニ	ヒ	ミ	イ	リ	リ
ウ	ク	ス	ツ	ヌ	フ	ム	ユ	ル	ウ
エ	ケ	セ	テ	子	ヘ	メ	エ	レ	エ
オ	コ	ソ	ト	ノ	ホ	モ	ヨ	ロ	ヲ

ガ	ザ	ダ	バ
ギ	ジ	ヂ	ビ
グ	ズ	ヅ	ブ
ゲ	ゼ	デ	ベ
ゴ	ゾ	ド	ボ

右圖のアイウエオと行<sup>ダ</sup>もろも<sup>ダ</sup>経<sup>ダ</sup>と<sup>ダ</sup>其アイ  
ウエオの五字をア行といひ次はカキクケコの五  
字をカ行といひ次はサセスセソの五字をサ行と  
いひ次のタ行ナ行等もこれに倣ひ又アカサタナ  
ハマヤラワと列<sup>ツキ</sup>もろも<sup>ツキ</sup>其ア韻一列の十  
字を第一段といひ次はイ韻一列は十字を第二  
段といひ次はウ韻一列の十字を第三段といひ  
次のエ韻オ韻等もこれに倣ふべし

三

五十連聲の性質

五十連聲も其要なるも此をアイウエヲの五字  
とし其次の要なるものをカサタナハマヤラワの

九字とナ合せて十四音なり其初の五字も喉  
音なり其内アの一字も口を開く最初乃声なれ  
ば韻ありあぶら亦聲を兼ね縦もイウエヲ  
の四韻を生じ横もカサタナハマヤラワ乃九声  
を生ず其次第縦のイもアの声舌も觸て轉ぶ<sup>レ</sup>ウ  
も唇も觸て轉ぶ<sup>レ</sup>エもイより生じ舌も觸てい  
<sup>レ</sup>ヲもウより生じ唇も觸てい<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>又其横の力  
はアの声少し喉の外も當りて轉ぶたり此を喉  
音なり牙も觸る故に牙音ともいふ<sup>レ</sup>サタナも  
其舌音なり舌の本も觸る又齒も觸る  
故に齒音ともいふ<sup>レ</sup>タも舌に中程も觸て腭を彈

トナを舌の末にて腭を弾む又鼻小入る故に鼻音と云いハマを共し唇音なづくハを唇の内よ觸て軽くマを唇乃外に觸て重しヤを喉音ながら舌を兼ていははラを舌音此極なり舌の端を卷てタナよりも猶腭を強く弾して云はる餘乃舌音やを異なり「ワを喉音ながら唇音を兼てハの字よりも猶唇の内小柔に觸ていはは」又彼乃横の力に縦此イを加ふをキとなり「ウを加ふれむクとあり」エを加ふれむケとあり「ヲを加ふむバコやなり」又キを引けむイとなり「クを引かばウとあり」ケを引けむエとなり「コ

を引けむヲとあり」其韻皆イウエヲ乃母字小歸る其次サタナハマヤラワに加ふるなりも右より同ト準いてあるなり此より横此九声を父と縦乃四韻を母とすまむ三十六の子音を生じて惣て五十音やなりあり  
 右ハ和字正監鈔の要を摘て其大意を述べたり然りながら爰ふハおハかへてアイウエオ乃五字を母音と名づけカ行以下九行の字を其韻皆ア行小歸る故にあを子音と名づりたり又彼の母音乃ヲの字今をオ此字と其所屬を互小替へたり此辨論ハ本居翁の字音假字用格に委

けをば爰おあなり

四 喉音アヤワ三行の辨

五十連声乃圖アヤワ三行の中ハイハ二所ニ出  
て井と同音ニ聞之又ウウニ所ニ出之又エエニ所  
ニ出之エと同音ニ聞之又オトヲも同音ニ聞之  
オトヲ各其差別ありなり扱其ア行の五字を  
輕ハナシ重ハナシ中声又ヤ行乃五字を輕ハ  
ナシ重ハナシトす其辨論字音假字用格  
ニ詳なれを爰ハ只圖解の之を掲げて大意  
を示すなり

喉音輕重等第圖

井 <small>ウ井</small>		イ		イ
エ <small>ウエ</small>		エ	エ	エ
ワ <small>ウワ</small>		ア		ヤ
ヲ <small>ウヲ</small>	オ	オ		ヨ
ウ <small>ウウ</small>		ウ		エ

ワ行重

ア行中

ヤ行輕

上圖よりて其音の成れり様を見りヤ行の  
イオエの約エオエ乃約又ワ行の井エウイ此

約「ウ」を「ウ」の約「エ」を「ウ」の約「ヲ」を「ウ」の約「ヨ」より  
 成るるを「ウ」の約「ア」行の音と同一とす約言のこ  
 第四章は此を「ウ」の約音といふなり然て其「イ」と「井」「エ」  
 と「エ」才と「エ」を文字異なむを「ウ」の約音とす又「イ」  
 と「イ」ウと「ウ」エと「エ」を同字ふれを「ウ」の約音とす  
 以上古「ウ」を文字も異様よりして用方よも各差別  
 あり「ウ」今も其文字も廢りて專同字を用ひ  
 るあり「ウ」なりけり故に其差別あきか如くた  
 るまじも言の活用よ「ウ」て「ハ」聊も乱るること  
 く「ウ」通ふ「イ」と「エ」を「ア」行に屬し又「エ」通ふ「イ」  
 と「エ」ハ「ヤ」行に屬すとあるべし

活用言此こと  
 第二篇の第三章

五濁音の辨

五十連声の圖中カサタハの四行を變じて濁  
 音となすことあり其音一たび濁る時其意  
 も亦替まり上古め其文字清音と異なり  
 一「ウ」今も清音の右肩に「ハ」符を記して「ウ」  
 を別てり又二言連ね「ウ」時を音便ふよりて下  
 乃一音を濁ることあり此を新濁といふ然れど  
 此新濁よ其例のありことなれを古人の用  
 る「ウ」跡を能尋て違を「ウ」むや「ウ」小意を注ぐ  
 其例

(一) 本濁音 ろぢ(氏) ちび(旅)

やどり(宿) さぎ(鷺) あど

(二) 新濁音 ちとびと(里人) やまがは(山川)

やまはく(山櫻) をど(小田) ちど

(三) 新濁音の用捨

をがえ(小川) とはいや  
おほがえ(大川) ちど  
やまだ(山田) かど(門田) ちど

又

ちひきい(千引石) ちつりつ(十握釵)

いづれ(五連声) あど

惣て数文字の下を濁らぬが例なり

又漢土の字音ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ、の上ハ、此音を換ぬると又ツの音を入る時ハ、其下音轉ヒトバ、ピ、プ、ペ、ホ、となる此を半濁音といふあり其字清音の右肩ハ、符を記して、これを分てり叔古言ハ、此ハ、乃音を換ぬずして、ナ行中マ行の音ハ、呼ぶとあり又ツの音ハ、口内ハ、含てて発せざり故ハ、半濁の音とツ此音の入声ハ、とてありあやむ

半濁音の例

かんむり 旱魃	てんび 天火	なんぷう 南風
いちばん 一遍	ふちぼん 日本	ちど

新用 三  
元 凡 其 元  
例 外 南 日 元  
標 根 本 運 日  
辨 服 淡 白  
一 本 運 日  
一 本 運 日

朱本訓書  
 鏡籠之服  
 割眼印眼  
 第藤腰奉  
 地壁

ツの入声例

今言	もづもら	もそら	專
古言	あゝをもづて	あゝをもて	是以
	ぶつたえ	ぶたえ	全
	そつちも	そちも	最
	あづはま	あはま	天晴

等

六の字此辨

五十連声の外ふんこむの音を捨る様なり音あり此を鼻へかけて呼ぶ声ふして本邦の正音よりあつたる故ふ不正音といへり扱此音を十行

とマ行の声ふ近きゆゑに後人特ふん人の字を製れり此を或説ふ二にの字乃變体なりむやいへり又和訓栞よを无此字の草体を変じたりなるべしとあまどもいふ其確證を得ば扱又これを古言とせに(將為)いとに(將言)なり(將成)などいへるが今言よせん、いとん、ちらん、あやひつらことよ其意相通へむ二の變体と意得て大槩違ふあやなかりを、尚此論を第三章小において詳し説くべし

七復習の問題

(一) 詞此生立を何を本として何々と成るべきか

(二)五十連声の國中アイウエオの五字を何行に  
あつり

(三)又問ヒフヘホの四字を何行にあつり

(四)又問フムエルウの五字を第何段に字にあつり

(五)同國中ワ行の五字を書擧げよ

(六)又問第四段に十字を書擧げよ

(七)同國中マ行第四段に字を何にあつるか

(八)又問ラ行第三段の字を如何

(九)同國中イウエの三字を何行に第何段にあつるか

(十)同國中同音に聞ゆる字のあるは何行にあつるか

(十一)同國中濁音と成る行を何々行にあつるか

(十二)又問サ行タ行の各濁音を讀分けて聞らせよ

(十三)新濁音と成るべき言をあげよ

但し例の外あり

(十四)又問半濁音と成るべき言をあげよ又ツ乃

入声のある言をあげよ 但し例の外なり

(十五)ンといつる言を何行に音に近く聞ゆるか



○第三章 假字用格 (カナツカヒ)

上古々清音五十字濁音二十字不限りて萬の言葉此外に出ることなく又其音も正しく其用法もおのづから定格ありて聊も乱るること無かりき然る中つ世より外國の字音移来多し随ひて撰ぬる音入る音半濁の音なりと種々相混りて内國の物語にも亦いをはるあをを得むなりみたり抑此假字用格を上つ世不定めりきる物名と言乃活用のあやまりとよよりて相定まきるものなれを後世の人乃私不定むべきことよありたり然れを古例よりて能く其用格を辨

知らばを物言ふこと能わざる者乃あやまり今其證とすへき書目や古人此用例とを揭示すこと左の如く

一 假字用格引證書目

新撰字鏡	僧 昌住著
倭名類聚鈔	源 順 著
和字正濫鈔	僧 契冲著
倭字正濫要畧	同 人 著
古言梯	楫取魚彦著
古言清濁考	石塚龍磨著
尚古假字格	山本明清著

二 通音の辨

假字用格の誤失も通音の明らたつはるは起れり  
其通音を容易に知りえむとせむ先左に掲げこ  
る圖解ふより考合すへ

ア行				
ワ行				
ハ行				

夕行濁音				
サ行濁音				

ワハの部

(一) ワハの通ひ二字此内ハの字を言の上よ在る

其例 かむ (瓦) いむ (岩)

(二) ワ乃字も常ふ言の上よ在る

其例 ゐむ (巖)

(三) 又ワの字稀よ言の中下よ在ることもあり

其例 よむ (弱) あむ (沫)

イ井ヒの部

(一) イ井ヒの通ひ三字此内ヒの字を言の上よあることを一言もな

其例 たひ (平) かひ (貝)

(二) イの字を常小言乃上ニあり

其例 いろ (色)

(三) 又イ乃字稀ニを言の中下ニ在るコトもあり

其例 ついえ (費) かい (擢)

(四) 又音便ニよりて他音ニイと轉ヒて言の中下

小在るコトもあり

其例 第七章轉言乃部下ニ擧ぐル

(五) 井の字を常小言乃中下ニあり

其例 まゐる (恭) ともある (位)

(六) 又井此字稀ニを言の上ニありコトもあり

其例 五音 五音 五音 五音 五音 五音 五音 五音 五音 五音

ウフ乃部

(一) ウフの通ヒ二字此内フの字を言乃上ニありコト

とナ一言もナらズ

其例 ゆふべ (夕) けふ (今日)

(二) ウ乃字を常小言の上ニ在り

其例 う (牛)

(三) 又音便ニよりて他音のウと轉ヒて言の中下

小在るコトもあり

其例 第七章轉言乃部下ニ擧ぐル

エエへの部

(一) エエへの通ヒ三字の内への字を言ニ上ニあり

ことと一言もなす

其例 さへづろ (轉) まへ (前)

(二) エの字を常よ言乃上ふ在り

其例 えご (枝)

(三) 又エの字稀ふを言の中下よ在りこやもあり

其例 ひえどり (鴨) ふえ (笛)

(四) 又此字を常よ言乃中下ふ在り

其例 すゑもの (陶) つゑ (杖)

(五) 又エの字稀ふを言れ上よ在りこともあり

其例 ゑひ (醉)

オヲホの部

(一) オヲホの通ひ三字此内ホの字を言の上ふ在り

こととハ一言もなす

其例 いほり (庵) かほ (顔)

(二) オの字を言の下ふありあとも一言もなす

其例 おほ (大)

(三) ヲの字を常ふ言の中下よあり

其例 かをろ (薫) とを (十)

(四) 又ヲ乃字稀ふを言乃上よ在りあともあり

其例 をそり (終)

ヂジの部

(一) チの字を濁音なり故ふ言乃上よ在りことあり

一言もなくして其用方廣し

其例 ちぢ (鯨) うぢ (氏)

(二)ジの字もヂの如くなまども其用方を狭し

其例 みぢ (短) きぢ (雉)

ヅ乃部

(一)ヅの字も濁音なり故小言の上は在ること一  
言もあらずして其用方廣し

其例 ちづ (薺) みづ (水)

(二)ズ乃字もヅの如くなれども其用方を狭し

其例 ちず (雀) ちず (葛)

右通音れとを和字正濫鈔小委しけきハ爰に

を其畧を記せり又音便よりて新濁中なる假  
字を其清音小帰して見るときはおのづから  
りき又活用言は渡るものも第二篇の第三章小  
わいてよく明らかふあつるを

三 言乃上におる字

ラ	リ	ル	レ	ロ
濁	音	ニ	十	字

四 ムといふ音の下ふれざる字

ア	イ	ウ	エ	オ
---	---	---	---	---

五 言小古今乃別ある事

古言を上世より傳ちたる言なるを今言を中

古以降不生りたる者にて或も外國の語を直  
し言居るて用ゐるも何れ又轉用したるもあ  
るを考すべし

其例

- きく (菊)
- せに (錢)
- せみ (蟬)
- もせを (芭蕉)
- かり (雁)

六 和語小平上去の三声あり事

平声を声乃本末上らず下らば平りふして長し  
上声を短くして直上り去声を鈍り様よ声を  
回つたなり又入声を下小フツクチキの音ありて  
切直あり然れども和語よを入声といふものあり

三 ことなく只平上去の三声のみあり今其図を  
示すたと左此如し

例	同声も續 様小より て變れり	ツ ル	ハ シ	ケ	ヒ	
大津	鴨	弦	橋	毛	日	平 声
大山	鴨河	釣	端	麓	樋	上 声
大野	鴨社	鶴	箸	食	火	去 声
ツホ	カモ					
ヤマ	カカハモ					
ノホ	ヤカモノ					

和語少て入声は準ふべき言の例

ゆふ (木綿)      たづ (龍)      おく (奥)

いち (市)      ゆき (雪)

七 漢字音假字格引證書目

漢字三音考      本居宣長著

字音假字用格      同人著

點信      僧 義門著

磨光韻鏡      僧 文雄著

詠歌心の種      萩原廣道著

八 漢字音假字格の摘要

(一) 入声の字乃語尾ふをフの字を用ふるなり

五

ウの字も書くなかり又フツクキの韻な  
る字も皆入声なりと和訓栞小見えたり

(二) ア、カ、サ、タ、ナ、ハ、マ、ラ、ワ、エ、ケ、セ、テ、子、へ、ム、エ、

クワ、といふ字の下よをイの字を書くべし

字音假字用格小見えたり

(三) ク、ス、ウ、ユ、ル、ウ、といふ字乃下よを井の字を

書くべしと同書よ見えたり

(四) 下中下ウの字を書く假字の例

クワ      クワウ      クワイ      クワン      クワク

クワツ      なを拵て字音の假字を三字を限と

し其中假字をヤ行ワ行乃字に限るなり

同書小見えり

(五) ナ行とマ行の字音を皆吳音あり此を強て言  
をむ中寸ら時を夕行とハ行の濁音即漢音  
るべし又第四段エ韻乃声小呼ぶそのふを漢音  
なりを和訓葉と見えたり

(六) 字音假字用格小韻尾を換ぬる假字よをム  
ニ、通用すべしといはれたまも其用格小異  
なりことあり其を九の条下乃説明を見てま  
るるなり

九 ムの二字用格の事

男信云 熟考ふるふ古書(古事記、日本書紀、万葉集等) 小彼

換ぬる韻の字乃其韻をラリルレロ小轉ハも定  
りあてて其をナニヌ子ノ用ある字として相通  
てマミムメモ小轉小韻の字やもとを相通ぜん云  
又同書小韻鏡なる十六撰の標識乃中臻や山と  
の撰なる字と又深と咸と乃撰ある字どりの古  
書小其韻を轉たりたる例を圖よ物したるもの  
あり其圖左に

深 (シム)	山 (サシ)	臻 (シン)
咸 (カム)		
撮	撮	
ム	ン	
バ	ガ	ナ
マ	ラ	
ビ	キ	ニ
三	リ	
ブ	グ	ヌ
ム	ル	
ベ	ゲ	子
メ	レ	
ボ	ゴ	ノ
モ	ロ	



上圖の用例

- (一) せみ (蟬)
- (二) せふ せん (錢)
- (三) とうし み とりしむ (燈心)
- (四) 志なぬ 志んぬ (信濃)
- (五) さぶらう さむらう (三郎)

十 復習の問題

- (一) 言乃上よたるはる字をいふ
- (二) 言の下よおかざる字ハハカ
- (三) 此音の下よたれざる字をいふ
- (四) 横列よ通ふ同音の字を何々なるか

(五) 相通ふ音にてワ井ウエヲ中聞ゆる字ハ何々  
 ちうか

(六) 常ふ言の上よおく字をいふ

(七) 常ふ言の下よたれく字ハハカ

(八) 爰ふ掲げたる言ども  
 入きよ  
 入きよ  
 入きよ

(九) 爰ふ掲げたる言の□内ふ其假字を書入れよ  
 てんきくこ□せ□ (天气快晴)

(十) 爰ふ掲げたる言ども乃假字を其音便よより  
 □あゆ (女湯)  
 □内ふ其假字を書入れよ

言ノ林

て轉もす時ハムノ字を書くべきや又この字  
を書くべきや各いふ

ねもぶら (懇) ぶらぶらのぶら (如件)

ほめだ (誉田)

*(Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side)*

○第四章 約言 (ツヅマリコトバ)

凡言小延言約言といふことあり其延言とて言乃  
短きが延まり又約言ハ言の長きが約まりて詞  
の調をおのづから程能くきこえはまるものなり  
然きを延はるまじきが延まり又約るまじきか約  
まりたる時ハ其調宜うはら故小古人の用あり跡  
を尋ねて能く辨へ知るを極む扱其約言此法ハ假小  
上たる字を父と下ある字を母とて五十連声  
乃因よりて其父字を縦行五字小轉ハ母字ハ横  
列十字小通ふを見り時ハねのづから縦と横と相合  
ふ所の角より約まりて即約字とたる其様角反縦

言ノ林

反横及の三格と成りあり又其三格の互小相重なりて約まることあり此を二重約といふ

一第一格角反の法ハ五十連声此圖よりて其父字を縦行小母字を横列に引合する時を縦横相合ふ所の字即其約字と成りあり

其例

古今集

春の心も此どけくあうまうハ

春の心も此どけかうまうと成り

上例父字クもカ行なる故小カキクケコと活きて母字アもア韻の字なる故第一段の力の字即約字と成り

二第二格縦反の法も五十連声の圖小よりて其父母の二字を引合する時ハ父字と母字と同行なる中より母字即其約字と成りあり

其例

拾遺集

人小あふむあそ思ひそめーか

人あふむあそ思ひそめーかと成り

上例父字ラもラ行なる故小ラリルレロと活きて母字レもエ韻の字なる故第二四段のレの字即約字と成り

三第三格横反の法も五十連声此圖小よりて其父母の二字を引合する時ハ父字と母字と同列を

る故小父字即其約字となるあり

其例

志があまむハ 志がまむ となる

上例父字カをカ行なる故小カキクケコと活きて母字アをア韻の字なる故小第一段の力の字即約字となる

四

第四格二重及ハ三字乃約りて一字となるるなり其法前三格の法小よまむを先二字が約りて一字となる然る後ハ其約りたる一字と他の一字と相對へて又前法小よれを其約字とす

二

なるり

其例

志があまむハ 志がまむ となる

上例先角反ふてシカの約りサとなりたるを

又父字ヤア此字を母字とする時ハ横反

ふて約りてサとなる

又例先横反ふてカアの約りカとありたるを

又母字トシこの字を父字とする時ハ角反ふて

約りてサとなる

五 復習の問題

爰小掲がくろ諸言の約りたる時ハ各いふ

(一) 吉野山小あははくろ花

- (一) あむらみの國
- (二) けつろけうちある花の見ゆるむ
- (三) 人れこころのそらきくあきま
- (四) 柳音 イイ、 イエ、 ウイ、 ウウ、 ウエ、  
ウオ、 の約り字
- (五) であい
- (六) き、おげ
- (七) 雪ぎ之道
- (八) ともあまかともあれ
- (九) 遠くあれがとといふ言の二重お約りたる言
- (十)

○第五章 延言 (ノバ、リコトバ)

延言を前章小いへる約言の反對して一字の延えりて二字となり或ハ三字となるりのなり其様種々あまども角互縦互横互此外なるべして約言よりも其活用廣かむ今其用例の多あるものを挙げて假小格を定めて初學の便とす

一第一格角互の法原字の同行ハ第一の音或ハ第五の音又稀ハ第三乃音ハ轉ひて父字となり然る後ハ行ハ行或ハ行へ渡りて其同列の字即母字となりて延えりなり

其例 廿行ハ行ハ最多くしてラ行ハ少く又四段の  
用言ハ多くありて其他の用言ハ少く

古事記  
二柱の神天ト此浮橋ト立トちて 也

天の浮橋ト立トちて 也

上例原字乃チモ夕行第二の音カが其第一の音タ此夕ト轉ヒて父字カとあり然ル後ニサ行乃同列へ渡りシの字カ延モり母字タとなりて  
タニ也トあり

三 第三格角反の法、四段の用言の第三の音クヌツ  
フムルの各字其行の第一乃音カサタハマラハ  
轉ヒて父字カとなり然ル後ニカ行へ渡りて其第三音のク此字即母字カとなりて延モりなり  
其例

論語

子のいふ。學而時習之。未嘗忘也。  
子のいむ。云々 となる

上例原字のいふもハ行の四段用言カ其フも第三此音カ乃其第一音乃ハト轉ヒて父字とあり然ル後ニカ行へ渡り其第三音のクカの字小延モり母字カとなりてハカとなる

三 第三格角反の法、四段の用言の外よて第三の音ヌムル此各字其行の第一の音ナマラハト轉ヒて父字となり然ル後ニカ行へ渡りて其第三音乃クカの字即母字カとなりて延モりなり  
其例

同字喬ト

一ノ廿六

高砂古今集の松もむく〜此友な〜ぬふも

松もむく〜此友な〜ぬふも

上例原字のヌもナ行第三の音なるケ其第一の音乃ナ小轉ひて父字となり然る後ヨカ行へ渡り其第三音のクの字小延もり母字やなりてナクとなる

四 第四格縦反の法原字の同行此某字小轉ひて父字となり然る後ヨ其原字即母字となりて延もりある

其例

(一) 秋の夜のなごぐも なごぐぐ となる

(二) 旅ややぐりむも やぐりせす となる

(三) 潤ふも りるほふ となる

(四) 船呼ぶも 船よむふ となる

(五) 装ひも よそほひ となる

上例原字(一)ク(二)ス(三)フ(四)ブ(五)ヒの各其同行のケセホバホの各字小轉ひて父字やなる然る後小其原字クスフブヒの各小のむり母字となりて(一)ケク(二)セス(三)ホフ(四)ハフ(五)ホヒとなる

五 第五格横反の法原字即父字となり然る後其原字の同列の某字小轉ひて母字となる

延まらなる

其例

行のむハ ユかざむ となる

上例原字のカ即父字とななり然る後其同列のサ行へ渡り其第一音のサの字小延り母字とふりてカサやなる

六

第六格二重反の法、一字此延りて三字となるものあり其法前三格乃法よよきを先一字の延りて二字となる然る後小其延りて一字を取りて又前法小依れを其延り字とななり

其例

(一) 足か せ たらふと

(二) 忌む せ いまはが やある

上例(一)ハ先角反りてリの延りてラヒやなり(二)其ヒの字又角反りてハヒと延りてラハヒとなる

(三)先角反りてニ此延りてマヒとありて其ヒの字又角反りてハリと延りてマハリやなる

右の六格の外ハ聊異ある例の二つ三つをたしあふをあらねど然るまでハ煩はしむれを爰にあ



けむ他日詞の通路といつる書本居春庭小より  
て能くあきまむる

七 復習の問題

爰に掲げたる諸の延言を何の格小よりて延ハ  
りるか各其格名をあげよ

- (一) 掛多むとかいこきハ 掛々まろも云くとちる
- (二) 天てふ日ハ 天てふ日とちる
- (三) まをすハ まをはく ちある
- (四) 事の足ぬも 足ふをぬとちる
- (五) 思ふことゆ憂くハ 憂けくやある
- (六) おもひをのづまハ 思ひをのづま ちある

- (七) よりと聞つたハ ちある
- (八) 思ひまどひを ちある
- (九) 物小ふまハ ちある
- (十) 世のあり(慣習)のりもあひと延ちり又其ひ  
のちと延ちりて世のちある

○第六章 畧言 (ハブカリコトバ)

畧言を延約の法ふよび言の中よおいて軽き音の自然よ畧るることありて其詞の調を程能くなまきそのをいふなり其畧言此様小種あれども其例二言三言を相連ねていふ時は最多今其用例乃多あまものをあげて假小格を定め初學の便とす

一 第一格ア行の音乃上小他の言此重なる時を其ア行の字此畧るることあり

(イ) 其例  
(ロ) たのあまのたを たのまの原 (高天原)

をのうへををのへ (尾上)

二 第二格同音の二字相重なるときも其一字乃畧かることあり

其例  
たびやをたびや (旅人)

三 第三格用言の最下此音の畧るをて、体言となることあり此を用畧体言といふなり

但一 体言乃こと第二篇の第一章いふ

其例  
うさひをうさ (謡)

言の補立

よげみ。を よげ (淀)

四 第四格体言の重複まゝ時ふ其中の音又え下  
音の畧かゝるあり

其例

あゝひきを あびき (網引)

あぶみを あぶみ (燈)

つきこもりを つこもり (晦日)

こゝいぢり。を こがいに (吾庵)

五 復習の問題

爰に掲げたる諸の畧言の本語をいふ。又各  
其格名を挙ぐるよ

(一) あさけ (朝明)

(二) すゞり (硯)

(三) ちが (白髪)

(四) のたまふ (宣賜)

(五) 乃りや (祝詞)

(六) ゆふくろ (弓袋)

(七) きぬき (礎)

(八) やや (宿)



同了喬立

○第七章

轉言

(ウツロヒコトバ)

轉言とて言の假字此中おいて某音の共同行  
 小轉ひ或は其同列小通ひて他音に變ずるその  
 をいふなり此も畧言より正しくいふべし  
 なるまじも往古より其例のあることなるまじ古  
 乃通を以て用あたる例を能く考合せて用ふるべ  
 し又此轉言の一變して他の言小涉ることあり此  
 を音便といふ是最近しかるべし  
 世の降ると外國の言此相混ざるやよよりて  
 成れるそのあて雅言の中つ世より崩れること  
 皆此音便より出で上つ世も多きまじ

やまじもなり然る故小文章よても用ふるべし  
 まじも歌小をさく無うるなり然る人の口  
 小言ひ易き小随ひたることなるまじ何れ言小  
 も皆イ、ウ、ン、の三字よの轉ふそのなりおの故  
 小ク、シ、キ、乃三字を其母韻のウ、イ、小轉ひま  
 マ、三、ム、の三字ハ大かゝるウ小轉ふなり扱又  
 某音此口調小後ひ訛りてンとなる言多し或ハ  
 言の中間よシの字を挿入れたるもあり此も皆  
 通音小あはれざるそのは轉ひて其本音を失ひ  
 をれあり又ウ、フ、チ、リ、ヒ、の五音を訛りてン  
 の音を入るごとくなりすあやありと黒澤ぬとの

言靈のまゝるべ田中ぬれ此日本文典なりと云々  
其論見えり

一第一格同行小轉ひたる言

其例

カ行	つきよ	を	つぐよ	(月夜)
サ行	かざ	を	かざ	(風早)
タ行	たま	を	たま	(手枕)
ナ行	いな	を	いな	(稲田)
ハ行	なへ	を	なへ	(苗代)
マ行	かみ	を	かみ	(神風)
ヤ行	ひえ	を	ひえ	(冷風)

二第二格同列小通ひたる言

其例

ア列	はる	を	はる	(春雨)
イ列	え	を	え	(夷)
ウ列	ぬ	を	ぬ	(烏羽玉)
エ列	た	を	た	(島)
オ列	こ	を	こ	(小田)

三第三格音便りて轉ひたる言或ハ插入する言

其例

イの部

あきこを あいご (秋田羽後の郡名)  
 つまごちを ついたち (朝日)  
 たきすもを たいぢみ (掃墨)  
 はきをいを さいちい (幸)  
 まいてを まいて (況)

ウの部

さくくを はくく (冊子)  
 たまくを たらくべ (給)  
 かぶべを くらべ (首)  
 ひむるを ひらが (日向)  
 (大奇)  
 (採葉)

エの部 (山間)

あきうどを あきんど (商人)  
 ぬきぞを ぬきんて (抽)  
 かづみを かんづみ (鑑)  
 びごを びんご (備後)

四 第四格訛てツの入声やなりたる言

其例

みろくを みろくた (新田)  
 たふとくを たんや (貴)  
 そちてを もつて (以)

言ハル

ほりすを ほつを (欲)  
むらびて を むかづて (向)

五 復習の問題

- 爰小掲げたる 同行の轉言を各いふよむべき
- (一) りつとみ (現身)
- (二) ちかき (白紙)
- (三) きりけ (木蔭)
- (四) みのそや (水原)
- (五) あををとあ (天少女)
- 爰小掲げたる 同列の通言を各いふよむべき
- (六) 山のあひ (山間)

(七) あを (吾)

(八) あな (彼方)



爰小掲げたる 音便の轉言を各いふよむべき

(九) つきたて (衝立)

(十) かき (斯)

(十一) みかき (髮搔)

(十二) ち (小路)

(十三) べ (侍)

爰小掲げたる ツの入聲となりたる言乃本音を

同了書五

言ノ林立

各いかに

(夫)をつや (夫)

(立)たつて (立)

(乃)乃つと (則)

(謂)いつて (謂)

(詞)乃橋立第一篇 畢

詞乃橋立第一篇 畢

明治十七年十月廿四日板權免許  
同年十二月出版

定價十六錢



山口縣士族

著者

弘

鴻



山口縣周防國吉敷郡  
山口馬場殿小路町第  
四十七番屋敷居住

同

出板人

弘

進



同所居住



